

新年号、令和について考えた

画家 小野寺 純一

私の手元に1個の懐中時計があります。表と裏側が透明になっていて、歯車がゼンマイの動力で回り、短針で時刻、長針で分、1秒きざみの針がせわしく動いて時を刻んでいく普通の時計なのですが、ひっくりかえして見ましたら、秒針が逆に回っているように感じ、一瞬時の流れが戻っていくような不思議な感覚にとられました。時刻は前に進んでいくという観念であったものが、見方を変えると全く別な世界が広がるという体験に、おどろいてしまいました。実際に時間は戻るわけがありませんが、今は新しい年号の令和元年、その前は平成であり昭和となるのですが、この際、年号などやめて、西暦だけでやったほうがスッキリしていい、などという意見もあったようですが、



(絵：小野寺純一さん)

日本国に育った私などは例えば、1964年に東京オリンピックが行われたというより、昭和39年といわれたほうがピッタリくるんですね。あの時、どこにいて、どんな暮らしをしていたか、その時代の空気感や匂いまでもわきあがってくる、そんな心もちになるんですね。ふりかえれば、明治生まれの伯父は頑固一徹で、曲がったことは許さない線香の匂いをさせた困った人でありました。大正生まれの父は割の合わない時代に生まれたもので、子供時代から日中戦争、大人になって徴兵で戦地に行き、散々な思いで日本に帰れば敗戦の報、焦土となったふるさとの再建、アメリカによる民主主義の時代がはじまり、とまどいながらもなんとか妻や子を食わせていこうと、ただガムシヤラに働いていたような記憶があり、ポマードの匂いがしておりました。そして戦後の昭和、家の中心に折り畳式の丸い卓袱台ちゃぶだいがあり、そこで宿題や、父の書きもの、家族での食事などなど、茶箆笥の上にあるラジオから流れる並木路子の唄う「リンゴの歌」、NH

Kの新諸国物語「笛吹童子」、大相撲中継などなど、胸おどらせながら聞いておりました。家族団欒だんらんの嬉しいひととき、貧しかったけれど、みんながそうだったので卑屈にもならず、近所に住む、大工をめざすお兄さんは、整髪料のバイタリスの匂いをさせ、あこがれでありました。昭和は64年で、戦争と平和の激動の時代でしたが、やがて平成・令和へと移ります。この6月、平成生まれ25歳になる女流画家と二人展をいたしました。彼女の作品に溢れるファンタジーの世界が同質のものと感じ、46歳という年の差でしたが、あふれる色彩と自在のイメージから放出されるエネルギーに、昭和育ちの私をタジタジとさせる展覧会でありました。

今から約150年前、江戸時代も終り、ちょんまげを結った人々が、明治という新しい時代をむかえました。そして令和へ、図書館にある小川未明の童話のなかに、「赤いろうそくと人魚」という一編の童話の中に、人魚が人間世界を語る場所があります。「人間の住んでいる町は美しいということだ。人間は、魚よりも、また獣物よりも、人情があってやさしいと聞いている」このように人魚が抱いている憧れともいえる想いが、令和の時代になったらいいなど、梅空をながめながら考えました。